

第19回福山教育フォーラム分科会
～学習機能を発揮する学校図書館モデル校事業～

I 「学校図書館が果たす役割, 今求められていること」

市教育
委員会

学習機能を発揮する学校図書館モデルの分科会を始めます。
この分科会では、児童文学評論家であり、福山の学校図書館アドバイザーである赤木先生をお迎えし、これからの学校図書館のあり方、役割、そこに向けて何をしていくかを考えていきます。
この分科会のゴールは、それぞれの先生が学校図書館の果たす役割を理解し、各校でこの夏休み、そして2学期に何に取り組むのか明確にもつことです。そのために、前半は、赤木先生の講話、休憩を挟んで、後半は各校で自校の図書館にどんな役割をもたせるか、どんな取組をしていくのかを協議する時間を設定します。
まず学校図書館が果たす役割、どのような学校図書館が今求められているのか知り、理解するために、赤木先生にお話していただきます。

赤木先生

「本とは」
一番初歩的なところから始めたいと思います。
初歩的なところは何かというと、「本とお客様である子どもたちが今どういう状況にあるか」ということの意味です。
本とは、情報を文字で紙に書き留めたものです。
昔は絵でした。ところが、絵というのは、同じ文化を共有していないと理解することができません。そして、抽象的なことは伝えられない。
例えばエジプトのレリーフに若い男の人の上に誰かが王冠をかぶせている絵があると、私たちはそれを戴冠式だと思います。なぜ分かるのかというと、同じことをまだやっているからです。同じ文化が続いている間は、理解ができます。そして、絵の場合は翻訳する必要がないので、広範囲に広がることができます。でも、それがどこの誰なのかを、いつなのかを絵で伝えることは難しい。絵は、同じ文化を共有していないと分からないので、私たちは今、洞窟に描かれた絵を、本当に理解することができない。このように絵で伝わっている文化の間を研究する学問は考古学といいます。
文字で記録されてからあとを歴史といいます。文字で記録されているということはそれが証拠として使えるということです。もちろん王様というのは嘘をつくものですから、書いてあることが全て本当だということはいませんが、そこにそう書いてあったということだけは揺るぎのない事実になります。

「本=文学ではない」
先生方だけではなく、ほとんどの日本の大人が、本と聞いて思い浮かべるのは、文学だと思います。だから読書指導とは、小説を読むように仕向けることだと思っている先生や親が多いだろうと思います。

ところが実際には、本というのは、文字で情報を書きとめたものですから、文学以外のものが多数あります。今福山の学校図書館は、NDCという0から9までの10個の数字を使った分類を採用しています。これで文学に当てられているのは9です。残りの0から8までの全体の10分の9は、文学の本ではないということになります。

「図書館は変化する」

図書館というのは、文学ではない本が圧倒的に多いところです。

例えば自然科学の本は文学ではありません。

工業や産業も文学ではありません。

芸術もスポーツも文学ではありません。

でも1960年代、70年代、80年代、この30年間は、ヨーロッパもアメリカも日本も文学全盛期です。その時に大きくなった人たちが「本=小説だ。」というイメージをもっても、それは仕方がないことだと思います。

これがひっくり返ったのは1990年代でした。

80年代は、本屋が売っている本の8割が文学でした。

ところが90年代に入ると、これが逆転して、2割が文学になります。

本屋はもう小説を売っていたら、ご飯が食べられなくなりました。

一番大きな理由は、おそらくコンピュータが実用化されたことです。

この30年間、なぜ文学が全盛期だったかという、自然科学が停滞していたからです。

アインシュタインが1915年に相対性理論を発表して、ようやく近代的の物理学が始まりました。人間は一度分かると猪突猛進します。ですから1950年代までには、今の宇宙理論のあらかたができて上がっていました。ニュートンの時代には、宇宙というのはイコール太陽系でしたが、アインシュタインは、宇宙はもっと広いということを証明しました。そうすると、人間の力ではこれはもう計算できないということが分かったわけです。太陽系内を計算するだけで、16年間かかったのです。太陽系外を計算し始めたら、生身の人間が幾らやっても、これは終わらないということが分かってしまう。人間達は大急ぎで人間よりも早く計算してくれる機械を作りました。たった20年でコンピュータは実用化されました。

というわけでその30年間、日本は一生懸命理科教育をやりました。

どこの学校にもビーカーやフラスコやアルコールランプがあって、子どもたちは実験をしました。

でもそれができるのはなぜかという、科学の世界が停滞していたからです。

新しいことが発表され、論文が発表されると、それを学会が検証にかかり、お墨付きを出さないと本にはできません。そこから教科書におりてくるには、さらに数年かかります。毎年のように新しいことが分かってしまう時代には、教科書はなかなかつくりにくい。理科の実験がずっとできたというのは、科学の世界がある意味、安定していたからです。

ところがコンピュータが発明され、あれこれ調べて確かめると、いろんなことが分かりました。

科学の世界はあっという間に進みました。

「図書館の鮮度」

コンピュータは本の世界とは一番遠いところにあるイメージかもしれませんが、コンピュータは本の世界もひっくり返しました。新しいことが分かると、古い本は使えなくなるからです。それまで30年間、科学の本は買い換えなくて済みました。廃棄もしないで済みました。中身が変わらなかったからです。本というのは、1回印刷されてしまうと、そこで、世界が止まります。次の日に起きたことはその本には入りません。その代わり、確固たる証拠として残るのです。

それまで学校図書館は、毎年毎年作られる本の中から、これは面白そうだという本を入れていだけで作業が済んでいました。ところが90年代に入って、本の中身で入れ替えをしなくてはならなくなりました。

例えば恐竜の本です。1990年代、中国で羽毛恐竜が2000体も見つかりました。恐竜は爬虫類です。でも羽根がついているということは、体は温かかったということです。恐竜学会は大騒ぎになりました。何年もの間、本は出ませんでした。出ないときに出ないということに気が付くのは大変です。出ないということはどこかで、学者が議論しているということです。ある時、一斉に恐竜の本が何十冊も出ました。議論が決着したということです。

今では、恐竜が羽毛をはやして自分の体を温め、氷河期を生き延び、姿・形を変えたのが鳥だ、という恐竜鳥説が最有力になっています。

というわけで、今の小学校・中学校図書館では、羽毛恐竜のことが書いていない恐竜の本は捨てないといけなくなりました。

その本全体を揺るがすような大きな発見か、それともボールペンで二本線を引いて、新しいデータを書き込んでおけば済む問題か、ということを考えます。羽毛恐竜は恐竜の世界をひっくり返すような大きな話題でした。ですから、羽毛恐竜が載っていない本は、学校図書館では廃棄対象になります。

ヒトゲノムが解読されて、人体の本も変わりました。ゲノムが解読されたことで、あまり関係がないように見えていたミステリーの世界もひっくり返りました。それまでは血液が落ちていても、血液型ぐらいしか分からなかったわけですが、今ではそれがどこの誰なのか特定できてしまうわけです。結構な数のトリックが使えなくなりました。ミステリーが作れなくなるときに、浮上してくるのは何かというと、正反対のジャンル、ファンタジーです。1990年代後半から約10年間、ハリーポッターがはまりました。この10年間は自然科学に関係ないヤングアダルトとファンタジーに明け暮れた10年でした。

今ある本でやっていきたいという気持ちはとてもよく分かります。しかし1990年代後半から2000年にかけて、今持っている本だけではやっていけなくなってしまうわけです。

「図書館の種類」

今子どもたちに必要だとされているのが、自然科学、サイエンスの本です。学校での調べ学習に使うジャンルのほとんどは、社会学です。

ということは今学校で使う本のあらかたは、自然科学の本と社会学の本だということになります。

社会学は、自然科学よりもっと、データ中心の社会です。データが使えなくなると、もうその本

を使えなくなります。

例えば、平成の大合併以前の日本地図はほとんど使えなくなりました。

あっているのは県境だけです。自分の市が載っていないような地図は使うことができません。

もちろん、県立図書館クラスになると、そういう本も捨てません。

なぜかという、かつてこの地名はどう呼ばれていたかとか、自分の家が今建っているこの土地は、かつて沼地だったのか、かたい岩盤だったのかを知りたいという方がいらっしゃるからです。県立図書館は、江戸時代の地図まで捨てないで持っています。

一口で図書館といっても、図書館には様々なサイズと目的があって、それによってどこまでの範囲の本を持っていなくてはいけないかが変わってきます。

県立図書館と、大学図書館、それぞれの専門図書館は、保存専門図書館です。

つまりデータを保存しておくことが目的なので、たとえ否定された学説でも、大学図書館はそれを捨てることはしません。基本的に、廃棄は考えていません。否定された学説等を必要とする人がお客様にいるからです。

でも学校図書館と公共図書館は、一般図書館です。

というわけで、必要な本は何かというと、バックヤードの本よりもむしろ、今の世界を書いた本、新しい本だということになります。

特に小学校図書館は、最小ではありますが、最先端で最末端でなくてはいけない図書館です。

児童生徒は、今年から勉強を始め、徐々に過去にさかのぼっていきます。

どこまで遡らなくてはいけないのか。ということは、その学校の今のカリキュラムがどうなっているのかにかかってきます。

小学校と中学校と高校の図書館は、似たような範囲は使いますが、どこまでかは微妙に差があります。特に高校までいくと、専門コースが増えてきますので、調理師免許が取れる学校だと、そのパーツだけは、プロ仕様になっていたりします。でも小学校・中学校図書館は、広く浅くがモットーです。

そうして、古い本ではなくて、小学校・中学校図書館の本は、データが新しくないとはいけません。

MRIが開発されて、人間の体の中を、意識があるときに覗くことができるようになりました。そうして、インナーマッスルが発見されたことで、スポーツの訓練方法は大きく変わりました。まさか今はウサギ跳びが載っている本は、小学校図書館にはないと思いますが、スポーツの本も、いつまでも使えるというわけではなくて、そのジャンルのルールが変わってしまったら、その本は廃棄対象になります。

訓練のやり方が変わり、今までのやり方は間違っていたということが分かれば、その本は排除されなくなりません。すべてのジャンルが一律に〇〇年で全部更新とできればよいのですが、各ジャンル世界が変わる時期が異なり、一律にはいきません。

宇宙は長い間、2006年で切っていました。なぜかというとその年に冥王星が惑星ではなく、準惑星になったからです。でもそれはもう2006年、17年も前の話です。宇宙の本は、新しい天体望遠鏡ができるたびにデータが刻々と変わっていきます。1年ぐらい前。もう何十年も木

星の衛星は 69 個だったのですが、いきなり12個増えました。数字が違ったぐらいなら、ボールペン二本線で消して、そこに新しい数を書き込んでいけばよかったのですが、ブラックホールが見つかってしまったときは、もうだめになりました。なぜかというブラックホールの本は、ほとんどがあるかないかの議論だからです。

ブラックホールの写真撮影に成功し、あるということが証明されてしまうと、ブラックホールという概念を最初に考えた人・ブラックホールという言葉が最初に使った人は残りますが、途中の本はほぼ学校ではいらなくなります。社会の本と科学の本は、学校図書館の本を見て、データが古くなっていたら、買い換えなくてはなりません。

「読まないのではなく読めない」

そして、コンピュータは文学も一掃してしまいました。

なぜかという 90 年代に、それまでずっと使っていた活版印刷からデータ印刷に移行したからです。活版印刷というのは、一文字一文字鑄造活字を組んで、それを紙に押し付ける版画と同じ要領のやり方です。活版はどうしても美しくできず、日本人はこのやり方をあまり好みません。

活版の鑄造活字は長いこと使っているとボロボロかけてきます。また文字と文字の間を綺麗に空けることが難しい。ところがデータ印刷の中は、それを自由自在に作ることができます。日本の文字は、普通に使っている文字だけでも大体 3500 から 4000 あります。

鑄造活字を作るとなると、それだけの数の文字を作らないといけません。でもこの面倒くさい作業を日本人は面倒くさいと思わない。むしろ喜々としてやります。

活版のときでさえ、50 や 60 は書体がありました。教科書体・明朝体・ゴシック・丸ゴシック・丸文字。なぜかという、日本人は、文字に意味だけではなく、プラスアルファも求めてしまうからです。書道はそういうものですね。

その文字の意味だけではなく、力強さを伝えるとか、この「雨」という字は、強風の雨だが、こっちの雨は、小雨だよ。みたいなことを文字の形で表現したいと、日本人は思ってしまう。ハーレクインロマンスがフルゴシックで刷ってあったら嫌だ、中に入れなと思います。日本人は、内容と所帯デザインが合っていないと嫌なのです。というわけで面倒くさい活版印刷ですら、50 も 60 も活字を作りました。

93・4 年あたりからデータ印刷が始まりましたが、2000 年に到達する頃には、日本の書体の数は 800 を超えていました。みんな、有頂天で文字をデザインしたのです。ですから日本人が英語で作られた本を見ると、殺風景だという印象を持つと思います。それはなぜかという、使われている活字の書体の数が少ないからです。日本では、雑誌で見開き1枚の間に 5 種類も 6 種類も書体を使います。見出しと本文の書体が違うわけです。

若者向けの雑誌になると、1 ページの見開きの間に 50 も 65 書体が使っています。わざわざ指定している人がいる、書体を組んでいる人がいるということです。日本人はそれを面倒くさいと思わずにやります。そうしたいのです。

2000 年に到達する頃には、各出版社は、21 世紀に残したい本は、ほとんど新しい書体デザインの文庫本にしました。主なものは、ほとんど新書体で手に入ります。

でも児童書の出版社はそれほどお金を持っておらず、残したい本すべてを、新しい書体にしてもう1回刷り直すことができませんでした。というわけで、内容に関係なく、活版印刷の書体で書かれたものは、今普通に寝転がって楽しんで読むことは難しい。この中身はとても大事、必要だから読むと思っているのなら多分読めますが、意識しないと読めるようにはならないと思います。

70代80代の方でもです。年配の方も同じ日本で生活しているので、デザインセンスは変わっていきます。

中学校図書館は、「『竜馬がゆく』がうちはあります。」ではなくて、それを開けて活版印刷の文庫本だったら、新しい書体デザインの「竜馬がゆく」を買ってやらないと、子どもたちが読むことができないということを意味します。

というわけで、文学も軒並み買い替えが必要になりました。

「本から子どもたちを見る」

文学の場合は、ひと時代の本というのは、大体読まれなくなります。本によってはその年代の差を乗り越えてくるものもあります。ですから一つの作品について、この作品を読むのは、何歳から何歳までだろうかということを考えると、その文化が分かります。例えば、仮面ライダーのファンは何歳ぐらいから何歳ぐらいまでだろうか。戦隊ものは何歳から何歳までだろうか、というようなことを考えていくと、いつの時代も同じではないのだということが分かると思います。もちろん、そういうジャンルは必死になって新しい子どもたちについていこうとします。そういう努力が功を奏して、何十年も続いていくものもあります。

でも例えば、新井素子さんのファンはもう軒並み50代と60代です。今の10代が読むかという、多分ほとんど読む人はいないだろうと思います。

ヤングアダルト文学という名前がついていますが、今の日本のヤングアダルト文学は、ほとんどヤングアダルトは読んでいないジャンルになりました。書いているのも60代、読んでいるのも60代です。

文化は1枚のお皿のようなもので、同じお皿の上に乗っているときには、同じ音楽やファッションや物語を楽しむことができます。ハリー・ポッターはどのくらいの人までが読めるかという、おそらく、今25・6歳から上の人たちの文化です。

その方たちは小学生のとき。ハリーポッターとダレン・シャンとデルトラクエストで大きくなりました。でもなぜそこで切れるのかというと、彼らは1995年Windows95ができる前の人たちだからです。日本はそこでWindows95、コンピュータ、以前と以後で文化が分かれました。というわけでその下の世代25・6歳から下の人たちは、ハリーポッター世代ではありません。映画が成功したので、しばらく余波は続きました。でも、前の晩にテレビでもってハリーポッターがやった。つまりタダで見ることができた。そうしたら次の日必ずパタパタ何人かがかけてきて、ハリーポッターの本ある？と聞いてきたものですが、ある時、そういう人が1人もいなくなりました。テレビでタダで見れても見ていないということです。

一時期、「給食番長」と「こびとづかん」が一世を風靡しました。

でもそれはもう15歳から上の方のもので、今の中学生や小学生はほとんど「給食番長」も

「こびとづかん」も見ません。もちろん中には、生まれつきの文学好きという方がいます。そういう子たちは、それがいつ作られたかということに関係なく、ありとあらゆるものを読みますので、そういう方は読むでしょう。

でも、一般的に、一つのクラスの中で、例えば40人中10人読んでいるねというふうにはならなくなりました。今の小学生と中学生はヨシタケシンスケです。ところが、今の小学校の3年生4年生ぐらいに文化の亀裂がもう1回入りました。

というわけで、今の低学年は、もうヨシタケシンスケに来ません。ついでに言えば、みらい文庫と、つばさ文庫にも来てくれません。みらいとつばさは今の高学年と中学生のものです。今の高校生から上の人は青い鳥文庫の時代でした。

そうやって文化に亀裂が入ったときに、すぐに代わりの作品が出てくるかという、これは出てこないのが普通です。一度そうやって文化が切れると、次の文化が新しく立ち上がってくるまでに大体5年ほどかかります。今の14・15歳ぐらいのときに亀裂が入ったので、次の文化が立ち上がってくるのは、今の小学校の4年生あたりだということになります。でも、いきなり立ち上がってくるわけではなく、大体それが軌道に乗るまでに2年3年はかかりますので、今の4年生、3年生、2年生、1年生のどこかで、小学校には文化の亀裂が入っているということになります。でも、今年の1年生は、ほぼ軒並みひっくり返った。新しい文化の人達だと言ってもいいだろうと思います。その人達は、前の1年生がこういう本を読んだから、こういう本も読むだろうと思うと、読みません。むしろ、一つ前の文化の本が一番古臭く感じます。それを否定しないと次には進めないですから、まずそれを読まないところから始めるわけです。

そして今の中学生が見つけたのは何かというと、クラシックです。今の中学生は、平成も昭和も対象も全部飛び越えて、明治まで戻りました。どこまでかという、夏目漱石と太宰と、芥川です。もちろんそういうものも仕掛け人がいて、商品がないと始まりません。でも幸い、角川の文豪ストレイドックスという売れている漫画がありますが、その漫画のイラストレーターさんを使って、オーソドックスな日本の古典文学に、新しい表紙カバーをかけてくれました。図書館員の間では、文スト文庫で通っています。

文豪の短編一つを取り上げて、各ページに全部綺麗な写真を入れた美しい本です。例えば芥川ならみかん。という、非常にオーソドックスは、ラインナップです。

この主流は、乙女の本棚といいますが、今福山の小学校・中学校で必ずこの二つは入れています。

中学校では、あっという間に売れます。そして、2年ぐらい前から、小学校の高学年でも動くようになりました。去年3年生がそれをぱらぱらとめくって惜しそうな顔で、やっぱり無理だよね。と言って帰っていった学校があったそうです。

と思っていたら何と、今年は小学校1年男子が、人間失格を借りて帰った学校が出ました。読めるか読めないか分かりません。

だってお客様に、これお本当に読めますかと聞くわけにはいかない。

そんな失礼なことは聞けません。読めるの?とは絶対に言うてはいけないことです。「はい、どうぞ」とかしたところ、クラスメート5、6人男子が、それに続いたので、文スト文庫があらかたなくなったそうです。これだけではなく、低学年は、岩波のハードカバーの lindgreen やドリトル

先生に回帰してきています。

2年ぐらい前にドリトル先生が読みたい1年生がいたので、つばさ文庫を出したところ「もっと歯ごたえがあるのがいい。」という学校がありました。岩波のハードカバーを出したところ、これがいいといって借りて帰られたそうです。

もちろん、古い本が全部そうやってカムバックしてくるわけではなくて、その中の「これとこれはバックするよね、これはバックしないよね」というのがあるので、なかなか難しい。例えばもうピッピは戻ってこないと思います。ホッツェンプロッツも戻ってこないでしょう。ジャンルを変えることでよみがえってくる本もあります。そういうことを出版社が仕掛けることができれば、うまくいけば古いものでもカムバックしてくることはあります。例えば、ビッグブックにする。もう何も本は持たずに、素でやる、ストーリーテリングにする。人形劇にする紙芝居にする。それぞれ全部ジャンルによって守備範囲が違いますから、そうやって変えることによって、よみがえってくるものはあるだろうと思います。

でもそれはなかなか難しい。今小学生の文学は、どこかに何か使えるものはないかと、みんな探しています。

今年の1年生はほとんど絵本の棚に行ってくれなくなりました。最初から見向きもしない。幼稚園と保育園にあるようなものが絵本だと思い、絵本は、もっと小さい人が読むものと思っているのかもしれない。でも実際の絵本には、小学校の高学年が読むような本も入っています。それはなぜかという、アメリカには漫画がないからです。アメリカはストーリー漫画がほとんどない。ストーリー漫画=アメコミです。小学館の名探偵コナンやドラえもんの学習漫画みたいな学習漫画が存在しない。今アメリカは日本の学習漫画やろうとしていることを、すべて絵本でやろうとしています。アメリカはこの5年せつと作っているのは文学ではなく、伝記です。膨大な量の伝記が作られています。科学者の伝記が欲しい、女性の伝記が欲しい、と言われていたのだと思います。コロナになる前に、アメリカにニューヨークに行ったのですが、その本屋は9段の書架が全部伝記で、その95%ぐらい知らない人でした。日本の出版社ではほとんどそれを翻訳しません。今200冊ぐらいは出ていると思いますが、それを全部翻訳することはしてくれません。なぜかという、日本の学校は、外国人の伝記を買わないというのが通説になっているからです。本当によく知られている人の伝記しか、売れない。

だからあいも変わらず、マザーテレサ、キュリー夫人、ヘレンケラーを作るわけです。エリザベスブラックシが出たときにはやったあとと思いました。この方は世界で最初の女医さんです。でもそれはシリーズもので、セットで売れるので、そのセットの中に上手に紛れ込ませて作る。そうしないと売れない。

それは別に学校が悪いわけではなくて、学校図書館だって買えるものなら買いたいでしょ。なぜ買わないのかという、買うお金がないからです。予算が150万もあつたら、必ず買うだろうと思います。そして、子どもたちの本の世界はもっと豊かになることができます。学校が買ってくれるのなら、もっといろいろなパターンの本を作ることができますから、でも30万しか予算がなかったら、やはりそういうところまで手を出すわけにはいかない。もっと優先順位が上の本を買っていくと、もうお金がそこで尽きてしまいます。

「子どもたちの変化」

今の1年生は、とても賢いと感じています。世の中を分かっている。そして、心理描写にも長けている。

今まで1年生には読まなかったような本、小学生には読まなかったような本を次から次に読めるようになりました。

逆に今まで小学校の1年生に読んでいた本が、これはもう幼稚で、このグループだともう読むことができないという現象が起きています。ですから読むときに必ず考えてしまいます。

この3年間ずっと天女銭湯と読んできた。でも、今年の1年生のこのクラスには、この本はもしかして幼稚かもしれない。もちろん福山であっても、そして隣の市の学校であっても、タイムラグはあります。

ですから、まだうちは小学校の3年生で、かいけつゾロリを読みます。うちは読みませんと、学校で様々です。

世間一般的には今、かいけつゾロリは、小学校ではなく、3歳ごろに読まれるようになりました。今かいけつゾロリとおしりたんていは、公共図書館で3歳が1人で読む本になっています。小学校の異変は、10年ほど前に、「働く車があんまり出なくなったな」と思ったときから始まりました。これは年々加速していき、ずっと小学校低学年男子の定番だった、ティラノサウルス、働く車、そしてカブトムシの本はほとんど出なくなりました。

そういう変化が小学校の1年生に上がったからといって、いきなり起きるわけがないということに気が付いて、これはもうちょっと年下の子どもたちを見なければ駄目だと思い、幼稚園や保育園の子どもたちを見るようにしました。そこで、「あれ、恐竜の本が年長さんにおりた」「年中さんにおりた」「年少さんにおりた」ということが見えてきました。

確実に10年前だったら、アンパンマンの本で3歳までもたせられていたと思います。でも今アンパンマンはほとんど1歳で終わり、初めからアンパンマンに入ってこない子たちもたくさんいます。アンパンマンを卒業して、大体は、プリキュアか戦隊もの。乗り物に行きます。ところが、その戦隊ものから、もう今は4歳になる前に抜けてしまいます。恐竜も今3歳で入って、10ヶ月ぐらいいかもたないような気がする。4歳になった頃にはもう恐竜から抜けてきてしまう。ということは、「強くて、大きいものには値打ちがあるとか、戦って勝った方が正しいんだ」という価値感から、その年齢で抜けてきてしまうということなのだと思います。ではそうやって抜けたその先には何があるか、どこに行くかと言うと、今は4歳を卒業すると、ブラックホールや元素図鑑に行く子が多くいます。それから生き物雑学に行きます。ざんねないきもの本を今大量に読んでいるのは小学校1年生で、それがもうそろそろ幼稚園までおりにかけています。

小学校がずっと使っていた。多くの図鑑の本は、小学校では使えなくなってきました。ある時1年生に図鑑の出したところ、「これじゃない」と話しミソニアンの1万円の図鑑を出したところ、「これこれ」と言って借りて帰りました。その時に「さっきの図鑑ではだめなの」と聞いたところ、「あの図鑑はおじいちゃんおばあちゃんが買って読んでくれたことがある。」と。子ども用の図鑑はもうあらかた2歳と3歳のときに読んでしまった。もう覚えてしまったから、彼は、それよりも上のレベルの本が読みたかったのです。

というわけで私が今福山改装で入れる本は、軒並み大人用の図鑑になっているということが

お分かりになると思います。

そうしてコンピュータ印刷になり、美しい写真と図鑑は簡単につくれるようになりました。それまでは口絵といって、最初の方にカラーのものはまとめて置いておくとか。非常に荒い写真しか入れることができませんでした。

コンピュータ印刷になって何が一番変わったか。自然科学の図鑑だろうと思います。今の図鑑は、とても綺麗です。そしてクジラの写真が大きくて綺麗だったら、それが大人用だろうが、子ども用だろうが、好きな人は構いません。

そういう本を子どもたちが喜んで借りていきます。

さんねんないきものたちだって、あれはもともと子ども用ではなく、大人用の本です。子どもたちが読みたいと思っている本を入れれば、子どもたちは、有頂天で借りて読んでくれます。

「自校の図書館を見直す」

できれば、百科事典や図鑑も、貸して欲しいと思います。

子どもたちは学校では分刻みで動いています。だから学校では、ほとんど本を読む時間がありません。借りて帰れないと、本を読むことは難しい。

私は百科事典も金曜日には貸して欲しいと思います。月曜日に返してもらえばいいだけです。土日は学校でそれを使う人はいないわけですから、借りて帰れないと、時間をかけてそれを読むことができない。子どもたちは本を使うことができません。そうして、今の公共図書館は本を貸します。

それはなぜかという、今の学校が買っている本は、コピー商品でオリジナルではないからです。博物館は、基本的にものは貸しません。なぜかというところが集めているものは、ほぼオリジナルで、壊されたり、汚されたり、失くされたりすると困るからです。

でも今学校が使っている本は、コピー商品で、この本を1万部つくったということは同じものが1万部あるということです。それがなくなったり、壊れたり汚れたりするのは想定内。使ってもらうための、コピーです。どのみち、今の自然科学社会学の本は、5年もたったら使えなくなりますから使えるうちに、できるだけフルに使って欲しい。子どもたちにできるだけたくさん貸して欲しい。「1人1冊ね」ではなく、この学校でこの人数で、これだけの冊数だったら何冊まで貸せるだろうかというふうに考えてください。

1人3冊まで貸してもOKだったら3冊貸してください。別に1冊しか貸さないという決まりはありません。決まりというのは、秩序を守るためにできるものです。必要がなくなったら作り変えないと。公共図書館でも、無制限貸し出しというやり方をとっているところは、何ヶ所もあります。そういうことをしたら、トラックでやってきて借りていく人がいるのではないかと最初はさんざん言われましたが、そんな面倒くさいことをするお客さんはいません。だって借りた本は返さなきゃいけないのです。一度やったら懲りますよ。

人数の少ない学校で本がたくさんあるのなら無制限で借りたってちっとも構わない。その学校その学校でルールは新しく決めればいいたらうと思います。できるだけ融通をきかせて、子どもたちが本を豊かに使えるようなシステムを考えていただきたいと思います。

市教育
委員会

お話の中で「学校図書館は最小であり、最先端であり最末端である」という言葉がありました。学術機関はつながり合っており、子どもたちが疑問に思ったことは、解決していけるのだということを以前赤木先生から教えていただいたのをよく覚えています。

赤木先生

「すべての知識に対する窓口」

最末端とは窓口ということです。

図書館司書の業務の中に、お客様を見て、お客様が欲しい情報をお客様が取るに行ける状態ではないと判断したら、自分を取りに行って渡すというサービスがあります。

レフェラルサービスといいます。

例えば隣の図書館にこの本はあると分かったとしても、このおばあちゃんは足が悪くて、そこまで行けそうないなと思ったら自分が代わりに借りに行くということを意味します。

公共図書館と学校図書館は、すべての知識に対する窓口であって、何か分から分からないことがあれば、まずそこに聞いてみる。その資料で、対応できるものだったら対応する。でも対応できないものだったら司書は、それが見つかる場所を探して教えなければなりません。例えば、それがあある建物、場所、この人に聞いたら分かるよ、ここに行けば分かるよと。

お客様が自力でそれはいけるなと思ったら、任せます。でもこの方が自力では無理だなと思ったら自分が情報は取ってきます。

データを用意するのは、図書館と図書館員の仕事です。

そのデータをもらって考えるのは、子どもたちの仕事です。

要するに、材料ですね。

材料を用意するのは図書館の仕事。

活用をするのは子どもたち。

材料がなかったら、何も始まらないから、その材料を用意する。

その時に、「これとこれが欲しい」ということを言ってもらえれば、図書館員は楽です。でも、これとこれが欲しいというときに、「肉じゃがを作ります」と言われてお肉がリストに入ってなかったら、お肉もいるよねというふうにして、「お肉もいますか」というようなことぐらいは聞きます。「忘れていました。それもいます。」と言われたら用意します。

欲求には顕在欲求と潜在欲求の二つがあって、顕在欲求というのは、お客様本人が分かっているものです。それは言ってこられます。

潜在要求というのはあるということを知らないので、言ってこられないものです。

でも話を聞いていて、「この人が欲しいのは多分これだな。でもこの方はそのことがあることを知らないな」と思ったら、「こういうものもありますが、いかがですか」というふうに出します。これも情報提供です。

そして学校図書館のバックアップをしてくれるのは、市立図書館。

市立図書館のバックアップをしてくれるのは、県立図書館。

県立図書館のバックアップをしてくれるのは、各種の博物館と、国立国会図書館で、それをバックアップしてくれるのは、大英博物館とメトロポリタン美術館です。学術機関はお互いに非常に仲がいい。だから、自分のところでは持っていない、分からない情報も、多分どこかの学術機関が持っているだろうと考えて照会にかかります。

以前私は、アンデルセンで本を作っていて、絵描きさんに、「ヨーロッパの火打箱の絵がどこにもない、どういうものか分からない」と言われました。

どこにデータがあるだろうと思い、たばこと塩の博物館に行きました。たばこを集めていれば、おそらくライターを集めていると考えたのです。

案の定、日本の火打ち箱は持っていました。でもヨーロッパのものは持っていませんでした。「ヨーロッパの19世紀のものが見たいんです」と言ったら、奥に入って行って、30分で戻ってこられて「これです」と写真を渡してくれました。

どうやったかという、ドイツの博物館に照会してくれたのです。インターネットのおかげで、そういうデータは瞬時で手に入るようになりました。

個人が同一の博物館に照会したときに、返事がしてもらえとは限りません。でも学術機関は、学術機関から聞かれたことは最優先でやってくれます。個人でやらなくても、ドイツ語も英語もできなくても、そういう仲介してくれるところに頼めば、データを持ってきてもらえる。

子どもたちの後ろには、世界中の博物館がついているのです。

日本の下駄の博物館は、足に履くものは何でも集めていますが、上半身に着るものを集めていません。でも大黒屋光太夫がエカテリーナ二世からもらったスリッパを持っています。だから足に履くものはそこに照会すればいい。でもそういう場所があるということが分からないといけない。一般のお客さんはそんな博物館があることを知らないですよ。

図書館員の仕事というのは、そういう場所があるということを知っていて、どうやって探したらお客様の必要なものが、見つかるだろうかという道筋を知っている。答えは知らなくていいという仕事なのです。

だから小さな福山の学校図書館でも、その後ろには、大英帝国がついているわけです。福山の学術機関を仲介すれば、メトロポリタン美術館の資料を使うこともできます。

市教育
委員会

すべての知識に対する窓口、学校の中に学校図書館という学術機関があり、そこは世界に繋がる場所なのだということを話していただきました。ありがとうございました。

【休憩】

2 協議「図書館の利活用」

市教育
委員会

教育長の話にもありましたが、学校図書館の環境整備は、今年で4年目に入り、たくさんの方のご寄附、ご理解をいただきながら、現在 100 校中 65 校の整備を終えています。来年度末、すべての学校図書館の整備を終える予定です。

この環境整備は、本=文学というイメージのまま、蔵書が文学に偏り、20~30 年前の本が更新されることなく、残り続け、本はあるけれども、読めない。そんな場所を、子どもたちが使いたい場所とするために、学校と協力しながら行っています。そして、その学校図書館の中身を作っていくのは、学校です。

「部屋が綺麗になった」で終わらず、図書館での子どもたちの姿が「本をもっと読みたい。新しいことを知れて嬉しい。勉強することが楽しい」となっているか、そこにこだわり、取組を進めていきたいと考えています。

今年度、旭小学校、神辺中学校をモデル校とし、どの学校でも抱えうる課題を、どう解決していくか、取組を進めているところです。どのような課題を見出し、取り組もうとしているかお伝えします。

旭小学校

本校では、学校図書館利活用の目的を、「児童生徒の学習情報センターとしての機能を発揮するために必要なことを考えて図書館運営を行うことで、児童生徒の主体的な学習活動を支援できるようにする」としました。

現状を把握するためにアンケート調査を実施しました。

本を読むことが好きと答える児童が 79%と、読書への意欲は高いです。

しかし、調べ学習をするときに本を使うと答える児童は 52%。

調べ学習をするときに、パソコン、インターネットを使うと答える児童は 65%。

授業で学校図書館を利用すると答える児童は 46%という結果が出ており、この結果から、本校の児童にとって、本は学習で活用するというよりは、読書のためのものという意識が高いことが分かりました。そして教職員にも同じ傾向がありました。

授業で学校図書館を利用すると答えた教職員は46%で、図書館の利活用が多い授業は、国語が92%であるのに対し、理科は 0%という結果でした。

この現状を踏まえ、学校図書館運営委員会を組織しました。

学校図書館運営委員会のメンバーは、校長、教頭、教務主任、研究主任、生徒指導主事、図書館コーディネーター、司書教諭です。現在、図書館運営について、定期的に協議する機会を持っています。

また全ての教員を3つのグループ「理科・生活科グループ」「国語科グループ」「社会科・総合的な学習の時間グループ」に分け、小中一貫図書館補助員との連携を充実させながら学校図書館の利活用研究を進める予定です。

また読書センターとしての機能を高めるため、高学年の図書委員会活動の充実をさらに推進さ

せませす。図書ボランティアとの連携を密に行い、児童の読書活動を活性化させていくことも考えています。

カリキュラムマップの活用する取組も進めています。

職員室のホワイトボードに各学年のカリキュラムマップを掲示し、いつ、どこの単元で学校図書館の利活用を計画しているのかを視覚化できるようにし、これまでの学校図書館を活用していなかった教科での計画的な活用を検討しています。

今後は

- ・ 調べ学習前の教材研究を充実させたり、子どもたちの学びを深化させるために、言葉や用語を正確に理解することを大切にしたりします。
- ・ 本で調べることと、インターネットで調べることを使い分け、自分自身が必要とする情報を正しく獲得できるようにします。
- ・ 2学期以降の実践に向けて、各グループでの協議を深め、学校図書館を利活用した学びづくりを行い、効果的な利活用について研修を深めていきます。

子どもたちの学びを広げたり深めたりすることのできる学校図書館になるよう、学校全体で取り組んでいきます。

神辺中学校

神辺中学校の取組について話します。

学校図書館の利活用に向けて、児童・教職員にアンケート調査を行いました。

本を読むことが好きな生徒は 68.7%。約7割の生徒が本を読むことに対して肯定的な回答をしていました。

しかし、学校図書館で本を借りますかという質問に対しては、借りたことがない生徒が 77.2%と非常に多く、学校図書館が利用されていません。

この結果には2つの要因があると考えています。

一つ目の要因は、開館時間の問題です。

これまで、生徒指導上の不安から開館は月水金の昼休憩に限定しており、生徒が使いたくても使えない状況がありました。

二つ目の要因は、学習端末の導入です。

調べ学習の際、多くの生徒がインターネットを使用し、図書館へ行く機会が減っています。生徒の意見として、タブレットのほうが早く調べられて、便利だという声が多く上がっていました。

このアンケート結果から、読書が好きな生徒が多いにもかかわらず、学校図書館が利用できていないことが大きな課題です。

この実態を踏まえて、本校で行った取組です。

一つ目は、開館の拡大です。

本校で3者懇談が行われる、7月25日～28日の間、放課後に図書館を開館しました。懇談の待ち時間を利用し、学習する生徒の姿が見られました。現在夏休み中にも図書館を開館しています。部活動が始まるまでの隙間時間を活用し、学習に訪れる生徒が多くいます。

二つ目は、学校図書館を身近に感じられるようにするための取組です。

図書委員会がしおりコンテストを企画しました。

しおりのデザインを募集し、掲示、優秀作品の投票をGoogle Classroomにて行いました。募集した案から本物のしおりを作成、来館者に配付し、利用者を増やすことができました。

続けて授業での活用です。

年度初め、図書館に対する利用イメージは10段階の中で5.1ポイントでした。

しかし、主に社会科の授業で図書館を活用し、1学期末に同様の項目でアンケートを実施すると、7.2ポイントとなり、2.1ポイント増加していました。

増加が顕著であった生徒の意見を紹介します。

図書館や本に興味がなかった生徒の中には、図書館のイメージが変わり、思っていたより本は調べやすく、たくさんの種類があるという意見や、図書館を利用したことのない生徒は、自分の好きな本や、いろいろな角度から意見が書かれていることに面白さを感じるという意見が出ました。

また、授業がきっかけとなり、図書館を利用したいと考えるようになった生徒も複数いました。

図書館の利点として、すぐに知りたい情報を詳しく知ることができ、面白いといった意見や、インターネットよりも正確に書かれてあり、本の方が情報を見つけやすいといった意見もありました。

自分で調べることで、学習に対する意欲や達成感が湧く生徒も多くなりました。

これらの取組を行い、現時点での状況を分析しました。

取組を行う中で、生徒だけではなく、先生の利用も増え、交流の場になっています。また、授業での利用も増え、そこをきっかけに来館する生徒が増えています。

現在では1日当たり平均して約45人の生徒が図書館を利用しています。

しかし、全校生徒563人に対し、この利用の人数はまだまだ少ないと考えています。

今後も継続して取組を行い、図書館来館者を増やし、学びに繋がるように進めていきます。

今後の取組としては、社会科以外の学校図書館を活用した授業づくり、外部講師を招いた読み聞かせの実践、開館時間の拡大という3点を考えています。

市教育
委員会

モデル校でそれぞれ見えてきた課題は異なっており、取組も様々です。

本日参加している学校も図書館に目を向けると、それぞれに課題があり、図書館にどのような役割を持たせて取組を進めていかなければならないのか、見えてくるはずですよ。

この後、福山市学校図書館利活用ガイドライン、そして図書館日誌等の数字を示した「図書館の利活用」を用いて、自校図書館にどのような役割を持たせ、その役割を発揮するために、何を行うか、考えていきます。

【各校協議】

全体での交流に入ります。

各校が記入したシートを各校で見、聞いてみたいこと等、意見を出してください。



水呑小学校

委員会活動をもっと充実させたいという意見が出ました。

例えば先生たち、図書ボランティアさんの読み聞かせだけでなく、委員会・高学年に読み聞かせを行うことで、興味を持って借りに行くなど、児童と図書館の距離が近くなるという意見が出ました。

	子どもたちの中で本に親しむ仕組みづくりが今後の課題だと感じました。
加茂中学校	現在、常時開館行っており、いつでも図書館に入って学習していいよという形をとっています。それをする事で、他校も見せてもらいましたがマナーの部分で困っている状態です。常時開放することは、とてもいいことだと思います、取り組んでみたのですが、本がそろわなかったり、本が違う場所に返っていたり、走り回る子がいたりという状態で、図書館としての機能を発揮できない状態になっています。他の学校でどのような取組がされているのかお聞きしたいです。
市教育委員会	昨年度と比べると常時開館をしている学校は30校以上増えています。 小学校では、もうほとんどの学校が常時開館して、いつでも利用できる状況を作っています。今の質問に対してどの学校でも答えられると思います。いかがでしょうか。 宜山小学校いかがですか。
宜山小学校	本校も常時開館を行っています。授業中は、高学年は自分たちで図書館を利用する姿があります。低中学年の子どもたちは先生と一緒にいくことが多いです。そこまでマナーで困ることはなく、大休憩・昼休憩も、図書委員がおり、私も時間があれば、行くようにしています。マナーが悪ければ、そのつど話をするようにしています。何か対策をするということはしていません。マナーについての話や、本に貼られているイラストシールで絵合わせのようになると本が返しやすいと話しています。また掃除時間は、ただ部屋を綺麗にするのではなく、本が乱れていれば整えるようにしています。
市教育委員会	広瀬学園中学校はいかがですか。
広瀬学園中学校	本校学校図書館は憩いの場になっていて、年度初めのオリエンテーションで使い方等の話をし開館をスタートしています。本校もマナーで困ることはあまりありません。教員はついておらず、朝から8時半まで、寝転がりながら本を読んでいる子どもの姿があります。幾らか話し声がするものの、禁止とはせず、交流の場というスタンスで運営しています。
市教育委員会	各校が入力したスライドの中にもマナーの徹底、管理ができないといった言葉がありました。その言葉が示すもの、先生たちの立ち位置、考え方を示していると思います。周りの読書活動の邪魔にならないようにする等、子どもたちと共有する必要があることはもちろんありますが、子どもたちが自発的に読書活動していく、本を読みたいという思いをもてるようにするためには、一律にルールがあってそれに従うもののみ利用が許されるとするのではなく、宜山小学校・広瀬学園のように、 <u>教師が子どもたちとやりとりしながら活用できる場にしていく必要があるのだ</u> と思います。 赤木先生の話であったように学校図書館はすべての知識の入口です。 <u>マナーが悪くて機能が発揮できないと考えて閉じてすべてなくしてしまうのではなく、学校で唯一の場所を最大限活用していくために、先生方の考え方、役割は非常に大切です。</u> ですから、常時開館に今後もこだわっていきます。
加茂中学校	子どもたちとルールを作っていくということが大切だなと感じました。学年問わず全ての子どもたちとともに考えていくことで、学習機能を発揮する図書館になっていくのかなと感じたので、本

	校でも取り組んでいこうと思います。
赤木先生	<p>そんなに本が乱れますか？</p> <p>小学校の4年生ぐらいまでは、分類に律儀です。</p> <p>だから、恐竜の中にカニが入っていたら嫌がって抜いてくれるのです。</p> <p>学年が上がると、面倒な気持ちが芽生えます。本をもとあった場所に返さないことが増えてくるかもしれません。</p> <p><u>一つの解決方法として、カウンター横に小さいブックトラックを用意しておき、返すところが分からない本はそこにに入れてくださいとします。</u></p> <p><u>公共図書館でもこれやっており、そこに返される本は今人気の本が多いです。そこに返されると、もとあった棚へ返る間もなく、また借りられていきます。図書館のヘビーユーザーは、そのブックトラックをわざわざ最初に見に行きます。</u></p> <p><u>ブックトラックを置けば、そこに返してくれると思いますので、やってみてください。</u></p>
水呑小学校	<p>教職員が図書館を利用したり、本と触れ合うという機会を大事にしたりしたいと考えています。</p> <p>駅家小学校のスライドの中に担任が本の紹介し読み聞かせをするとあったのですが、何かを具体的な案や以前実施していたことがあれば聞かせください。</p>
駅家小学校	<p>駅家小学校の中で話をして取組のアイデアを出し、これからどう進めていくか考えていくところです。まだ担任が紹介するという取組は実施してないので、これからやっていきます。</p>
市教育委員会	<p>今後、各校が実践する中で分かったことを共有できる場等を設定していければと思います。本日図書館から学校を見て考えていただきました。この夏休み、2学期で実践に繋げてください。</p> <p>この分科会の協議をここで終わりとします。</p> <p>赤木先生そして参加校の皆様、ありがとうございました。</p>